

使徒言行録 通読

3月



(3月30日)「使徒言行録 17:16~21」

パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。
(使徒言行録 17章 16節)

- ・ついにパウロは、アテネまでやってきました。ギリシアにあるアテネは、世界最古の都市の一つで約3400年の歴史があるそうです。芸術や学問、哲学もさかんで、いわゆる「知識人」が多くいたようです。
- ・わたしたちがイエス様の福音を伝えるときに、「頭から」入る人と「心から」入る人がいます。「頭から」入る人の場合、論理的・科学的に証明を求められることもあります。しかしイエス様の復活など、なかなか難しいものです。
- ・さらにギリシアの人たちは、信じる・信じない以前に、「新しい知識」だけを求めてパウロの話聞いていたようです。このような聞かれ方は、話す方からするとなかなかしんどいものです。

(3月31日)「使徒言行録 17:22~31」

これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。

(使徒言行録 17章 27節)

- ・日本には、「八百万の神々」がいると信じられています。またギリシア神話をみると、アテネの人たちもたくさんの神々を信仰していたようです。「知られざる神に」という祭壇は、その存在に気付かず、拝むのを忘れてしまっている神さまのための祭壇のようです。
- ・パウロはその人々の信仰を真っ向から否定するのではなく、「知られざる神に」という祭壇を取っ掛かりに話を始めました。そして彼は、自分が伝えたい内容を語り始めるのです。
- ・このパウロの姿勢に、わたしたちも学ぶところは多くあると思います。日本で宣教をするときに、わたしたちの目には「間違っている」と思えることも多くあるかもしれません。しかしそれを簡単に否定せずに、福音を伝えていく。大切にしたいことです。

(3月1日)「使徒言行録 12:1~5」

こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。
(使徒言行録 12章 5節)

- ・ヘロデ王は迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺しました。ゼベダイの子ヤコブとヨハネは漁師だったときにイエス様に声を掛けられ、ずっと従ってきた最初の弟子たちです。
- ・聖書には「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください(マルコ 10:37)」と言ったり、サマリア人に対して「彼らを焼き滅ぼしましょうか(ルカ 9:54)」と言ったりするエピソードが載せられています。
- ・しかし彼らはイエス様の変容やゲツセマネの園での祈りの際も、ペトロと共に三人だけ連れられていきました。そのため共同体の中では、重要人物となったことでしょう。その一人であるヤコブが殺され、さらにペトロが捕らえられてしまうのです。

(3月 2日)「使徒言行録 12 : 6~11」

ペトロは我に返って言った。「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」
(使徒言行録 12 章 11 節)

・ペトロはヘロデから引き出される前夜、兵士たちの間で眠っていました。明日処刑されるかもしれないというのに、あまり緊張が感じられません。よほど疲れていたのか、それともすべてを神さまのみ心にお委ねしていたのでしょうか。

・教会の人たちは、祈り続けていました。ヤコブという指導者が殺害され、続いてペトロが捕らえられた今、武力でペトロを取り戻そうと考えても無理はないところです。しかし彼らは祈りによって、神さまに救いを求めたのです。

・主の天使によって、ペトロは助け出されました。ただここで思い違いをしてはいけません。ペトロは重要だから助かったのだとか、ヤコブはそれに劣るから殺害されたのだとか、そういうことではないのです。わたしたちにはわからない、神さまのご計画があるのです。

(3月 3日)「使徒言行録 12 : 12~19」

ペトロの声だと分かると、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。
(使徒言行録 12 章 14 節)

・牢に入れられたペトロのために、教会は祈り続けていました。人々はマルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に集まります。いわゆる「家の教会」です。ここに教会の原点があります。

・ペトロはそこに行き門の戸を叩くと、ロデという女性が出てきました。彼女は声で、すぐにそれがペトロだということがわかったようです。ただ彼女はおっちょこちょいだったのでしょう。喜びのあまり、肝心の門を開けることを忘れていました。

・そして驚いたのは教会の人たちだけではありません。二人の兵士は、鎖につながれ自分たちの間で眠っていたペトロがいなくなったことを知り、恐怖を感じたことでしょう。彼らは神さまのみ業の前に、ただ無力でした。

(3月 28日)「使徒言行録 17 : 1~9」

しかし、ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場にたむろしているならず者を何人か抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして搜した。
(使徒言行録 17 章 5 節)

・フィリピを出たパウロたちは、続いてテサロニケに入ります。このテサロニケにも、パウロは手紙を書いています。聖書の後ろにある地図で、その位置を確かめてみてもいいかもしれません。

・パウロは安息日に、ユダヤ人の会堂で聖書を引用して論じ合っていました。ユダヤ人の中にはイエス様を信じる人も、そうでない人もいました。さらに信じる人の中には、ギリシア人が多くいました。

・それを見て、ユダヤ人の心に妬みが生まれます。「妬み」は聖書によく登場する、あまり好ましくない感情です。他人の物や心を妬むことは、自分が神さまから愛されていないと思ってしまうことと繋がっているようにも思えます。

(3月 29日)「使徒言行録 17 : 10~15」

ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、そこへも押しかけて来て、群衆を扇動し騒がせた。
(使徒言行録 17 章 13 節)

・わたしたちの周りにも、執拗に他人を攻撃する人がいます。現代は SNS などが発達して個人の言いたいことがすぐに発信できるようになった分、そのような傾向は強くなっているのかもしれませんが。

・テサロニケとベレアとは、決して近くはありません。しかしテサロニケのユダヤ人はベレアまでやって来て、群衆を扇動し騒がせました。彼らはどうしても、パウロの言葉を受け入れることはできませんでした。

・反面、ベレアのユダヤ人は、み言葉を受け入れた後にそのとおりにかどうかが聖書で調べていたそうです。わたしたちも自分とは違う意見を耳にしたときに、批判し攻撃する前に、聖書に立ち帰ることが大事なのです。

(3月 26日)「使徒言行録 16:25~34」

二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」

(使徒言行録 16 章 31 節)

・パウロとシラスは牢の中で、賛美の歌を歌い、神さまに祈っていました。彼らは投獄されるたびに、何度も鞭で打たれていました。にもかかわらず、神さまに賛美をささげていたわけです。

・わたしたちは苦難に陥ったときに、賛美する心を忘れ、祈ることを怠ってしまうことが多くあります。でも、それではいけないのです。苦しく、困難な中にあるときにこそ、神さまを賛美し、祈ることが必要なのです。

・突然大地震が起き、パウロたちは自由になりました。しかし彼らは、逃げ出そうとはしませんでした。神さまの導きを、深く感じたのでしょう。そして神さまの恵みが、看守とその家族一同にまで注がれます。彼らは神さまを信じる者となるのです。

(3月 27日)「使徒言行録 16:35~40」

それで、看守はパウロにこの言葉を伝えた。「高官たちが、あなたがたを釈放するようにと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい。」

(使徒言行録 16 章 36 節)

・パウロとシラスは看守の家で食事をし、看守とその家族に洗礼を授けますが、そのあとまた牢に戻ったようです。確かにそのまま彼らが牢から出てしまうと、看守に責任が負わされることになるでしょう。

・そして夜が明けると、パウロたちを釈放せよとの命令が下されます。しかしパウロはここで、驚くべきことを告白します。パウロとシラスはローマ市民であったという事実を、ここで告げるのです。

・ローマの市民権を持つ人は、ローマの植民地において逮捕や投獄から守られていたようです。高官はパウロたちがローマ市民であることを知らなかったとはいえ、公衆の面前で鞭打ってしまいました。しかしなぜ、パウロはもっと早く言わなかったのでしょうか。

(3月 4日)「使徒言行録 12:20~25」

するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。

(使徒言行録 12 章 23 節)

・ティルスとシドンは、エルサレムからかなり北に離れた場所です。ガリラヤ湖よりさらに北です。ヘロデ王はその地域の人たちに腹を立てていました。原因は書かれていませんが、住民は何とか機嫌を直してもらおうと、おべっかを使います。

・「素晴らしい！神さまの声だ！」、その住民の声にヘロデは酔いしれたのかもしれない。ヘロデは神さまに栄光を帰さなかったという理由で、主の天使に打たれてしまいます。つまり、死んでしまったのです。

・「わたしがしたことではなく、神さまがなさったのです」。時折、このように語る方に出会うことがあります。素晴らしい信仰だと思えます。わたしたちも心から、神さまのみ業に感謝していきたいと思えます。

(3月 5日)「使徒言行録 13:1~3」

彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」

(使徒言行録 13 章 2 節)

・ここから聖書は、宣教旅行の様子を伝えていきます。聖書にはいくつかの地図が載せられているものがあります。その「パウロの第一次宣教旅行」のスタートに当たるのが、今日の箇所の記事です。

・その地図を見ると、アンティオケアは地中海の東、シリアの西部にあることがわかります。エルサレムやガリラヤから遠く離れたこの地に、初代教会の拠点がありました。異邦人の地に、彼らは根を張っていくのです。

・彼らは出発する前に、礼拝と断食をおこないます。そして「自分たちの思い」ではなく、「神さまのみ心」を願い求めます。その結果、バルナバとサウロ（のちのパウロ）が選ばれます。シメオンとルキオとマナエンは二人の上に手を置き、送り出していくのです。

(3月 6日)「使徒言行録 13 : 4~12」

この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。

(使徒言行録 13 章 7 節)

- ・今日の箇所の最初に、「聖霊によって送り出された」と書かれています。彼らは自分の意思や力で、宣教旅行を開始したのではありません。「神さまに押し出されて」、彼らは出発します。彼らの舟には、いつも神さまが共にいたのでしょうか。
- ・二人に同行したヨハネはゼベダイの子ではなく、12 章 12 節に出てくる「マルコと呼ばれていたヨハネ」です。マルコによる福音書の著者とされてきた人物です。彼らはキプロス島で、総督に出会います。しかしそれを魔術師エリマが妨げようとしています。
- ・ここからサウロは、ユダヤ名の「サウロ」ではなくギリシア名の「パウロ」と呼ばれていきます。これから異邦人伝道が本格的になるという意味もあるのかもしれませんが。彼はエリマに毅然と立ち向かい、その結果、総督は信仰に入っていきます。

(3月 7日)「使徒言行録 13 : 13~25」

パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。

(使徒言行録 13 章 13 節)

- ・13 節に、ヨハネ（マルコ）が一行と別れてエルサレムに帰ってしまったという出来事が書かれています。その理由には何も触れず、ただ事実だけが簡単に述べられています。一体彼に何があったのでしょうか。
- ・実はこの出来事は、のちにパウロとバルナバとの間に口論を引き起こし、別行動をもたらすきっかけとなります。しかしこのとき、パウロはヨハネに対して何か言ったとは書かれていません。「去る者は去るがいい」という思いなののでしょうか。
- ・パウロはコロサイやガラテヤという聖書でも聞いたことのある場所に近い、ピシディア州のアンティオキアで語り始めます。そこにはユダヤ人もいました。彼らはディアスポラとして、共同体を形成していました。

(3月 24日)「使徒言行録 16 : 16~18」

わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。

(使徒言行録 16 章 16 節)

- ・聖書には悪霊や汚れた霊が出てきますが、ここに登場するのは「占いの霊」です。これはどういう霊なのでしょう。「占いをせずにはおられない、こんなはずじゃなかったのに！」という感じでしょうか。
- ・ただ彼女がパウロたちに対して言い続けていたことは、あながち間違いではありません。「いと高き神の僕」、「救いの道を宣べ伝えている」、この言葉自体には、何の問題もなさそうです。
- ・問題は彼女が占いを商売にし、さらにその利益を当てにしている主人たちがいたということです。どのような形で、彼女にお金が入ったのかは書かれていません。しかしパウロは、福音宣教を使ってお金を稼ぐ彼女たちをやめさせました。

(3月 25日)「使徒言行録 16 : 19~24」

この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

(使徒言行録 16 章 24 節)

- ・パウロたちは、フィリピで活動していました。そこはローマの植民地でした。パウロたちはフィリピの人たちから見たら「よそ者」です。その彼らが、占いの霊に取りつかれた女性を追い払ったのです。
- ・彼らにとってパウロがその女性を追い払ったことは、せっかくのお金儲けのチャンスが逃げていくことでした。パウロとシラスは、ただただ邪魔な存在になってしまったのです。そこで彼らは、パウロたちを高官の前に引きだします。
- ・パウロとシラスは、牢に入れられました。そのとき、他の群衆はどう思っていたのでしょうか。教会の暦では、今日から聖週です。「十字架につける」とイエス様の前で叫び続けた群衆の姿と、重なってみえます。

(3月 22日)「使徒言行録 16 : 6~10」

ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。

(使徒言行録 16 章 7 節)

- ・今日の箇所冒頭にある「彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」とは、一体どういう意味なのでしょう。その後には、イエス様の霊が行く手を防いだことも書かれています。
- ・わたしたちも人生の中で、思う道に進めなくなることがあります。物理的な道だけでなく、生きる道も制限された経験を持っている人もいます。でもそこには、神さまの導きがあるのかもしれない。
- ・パウロたちは幻によって、マケドニアに向かいます。これは決して「偶然」ではないのです。神さまがご計画された、「神の必然」です。そして神さまはわたしたちをも、導いておられるのです。

(3月 23日)「使徒言行録 16 : 11~15」

ティアティアラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。

(使徒言行録 16 章 14 節)

- ・パウロは次に、フィリピへと行きます。フィリピはマケドニア州第一区の都市で、ローマの植民地でした。しかし「フィリピの信徒への手紙」が書かれたように、そこにも教会共同体が生まれていきました。
- ・そこでパウロは、集まって来た女性たちに話をします。残されている手紙の内容から男尊女卑のイメージが強いパウロですが（この考えは個人的なものです）、福音を女性たちにも分け隔てなく伝えています。
- ・その中に、リディアという女性もいました。彼女はパウロたちを招き入れ、家に泊めさせます。それは主が、彼女の心を開いたからです。神さまの導きと招きに心を委ねるときに、神さまは新たな道を開いてくださるのです。

(3月 8日)「使徒言行録 13 : 26~35」

兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中において神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。

(使徒言行録 13 章 26 節)

- ・パウロは人々に語り続けます。アブラハムの子孫とはユダヤ人のことでしょう。そして「あなたがたの中において神を畏れる人たち」とは異邦人のことです。彼らは一緒になって、パウロの言葉に耳を傾けていました。
- ・パウロが語ったのは、「イエス様の十字架と復活」です。すべての説教は、ここに行きつくといっても過言ではありません。ただここでは、イエス様は何のために十字架につけられたのか、どうして復活したのかまでは詳しく語られていません。
- ・聖書（旧約聖書）の言葉を引用しながら語ることによって、神さまの救いの計画の継続性をパウロは伝えます。ペトロやステファノが語った説教もそうでした。キリスト教の礼拝で旧約聖書が読まれるのには、大きな意味があるのです。

(3月 9日)「使徒言行録 13 : 36~43」

集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。

(使徒言行録 13 章 43 節)

- ・パウロは説教を通じて、二つのことを人々に告げます。一つは、イエス様によって罪の赦しが告げ知らされたということ。そしてもう一つは信じる者は皆、イエス様によって義とされるということです。
- ・特に二つ目の「信じることによって義とされる」ということは、「信仰義認」という言葉でわたしたちも聞いたことがあると思います。それまでの考え方は、「行為義認」（良いおこないによって義とされる）というものでした。
- ・その福音を聞いた人々は、パウロとバルナバに翌週も来てほしいと頼みます。さらに彼らについていき、語り合います。その中にはユダヤ人だけではなく、「神をあがめる改宗者」も多くいました。

(3月10日)「使徒言行録13:44~52」

しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。

(使徒言行録13章45節)

・パウロとバルナバが告げる主の福音を聞こうと、人々は集まってきました。しかしその中で、ユダヤ人がひどくねたまます。パウロたちの言葉に反論するというよりも、自分たち以外の人にも救いの扉が開かれたということに対して、ねたむのです。

・そこでパウロは語ります。それは神の言葉は、まずユダヤの人に語られるはずだったということです。そのあとで全世界に広められるはずだったのに、ユダヤ人が拒んでしまったということを描き出すのです。

・結果的に異邦人はパウロの言葉を聞いて喜びますが、ユダヤ人はパウロとバルナバを迫害して追い出します。同じ言葉を聞いたにもかかわらずです。教会でも、気を付けないと同じようなことが起こり得ます。

(3月11日)「使徒言行録14:1~7」

ところが、信じようとしないユダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。

(使徒言行録14章2節)

・ガラテヤの内陸部にあるイコニオンに、パウロとバルナバはやって来ました。神さまが二人の手を通してしるしと不思議な業をおこなったため、多くの人ユダヤ人やギリシア人が信仰に入ったと書かれています。

・しかし、信じるができなかったユダヤ人もいました。それはそうだと思います。「新しい教え」に対する拒否反応があっても、何らおかしくはありません。さらに彼らは、パウロたちを迫害しようとしています。

・それも、普段関わることを避けていた異邦人さえも扇動しているわけですから、とても強い思いが働いていたのでしょう。「自分は受け入れられないけど、受け入れる人はどうぞご自由に」とはいかなかったのでしょうか。

(3月20日)「使徒言行録15:36~41」

しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきでないと考えた。

(使徒言行録15章38節)

・議論の衝突は、現代の教会でもよく見られるものです。パウロの思いも理解できるし、バルナバの気持ちも痛いほどよく分かります。そして二人は自分の意見を譲ることができませんでした。その結果、別行動をとることになります。

・これは、「分裂」でしょうか。そうではありません。二人はそれぞれの地に向かい、別々に行動しただけであり、アンティオキアの教会が二つに割れてしまったということではありませんでした。

・わたしたちの間でも、意見の相違や衝突はあります。しかしその中で、「神さまのために」という思いさえあれば、たとえ方向性が違ったとしても根っこの部分は揺らがないのではないのでしょうか。

(3月21日)「使徒言行録16:1~5」

パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

(使徒言行録16章3節)

・バルナバと別れて第二回宣教旅行に出発するパウロは、テモテという人物を連れて行くことにします。彼の母親はユダヤ人でしたが、父親はギリシア人でした。そのため、テモテは割礼を受けていなかったようです。

・エルサレムの使徒会議の決定を知るわたしたちは、テモテに割礼を施すパウロの姿に違和感を覚えるかもしれません。「結局割礼が必要なんじゃないか」と思われても、不思議はないからです。

・しかしパウロが大切にしていたのは、ユダヤの人たちの思いです。これまで彼らが大事にしていたものを簡単に否定するのではなく、ある意味尊重するのです。日本における宣教を考えると、大いにヒントになる姿勢だと思います。

(3月18日)「使徒言行録15:22~29」

使徒たちは、次の手紙を彼らに託した。「使徒と長老たちが兄弟として、アンティオキアとシリア州とキリキア州に住む、異邦人の兄弟たちに挨拶いたします。
(使徒言行録15章23節)

- ・エルサレム使徒会議で決議された内容は、手紙に書かれパウロやバルナバたちに託されることになりました。手紙を送りつけるだけでなく、また口頭だけでもなく、文書と説明をあわせておこなっていくのです。
- ・このことによって教会の決議に、より大きな権威がもたされているようにも思えます。そもそも事の発端は、何の指示も受けていない人が、「異邦人にも割礼を受けさせるべきだ」と言い出したことにありました。
- ・そのことを教会は、正していきます。手紙の途中に、「聖霊とわたしたちは」という記述があります。会議の中でも聖霊の導きを求め、この内容が決定するために聖霊が働いたということを明確にします。誰かの思いではなく、これは神さまの思いだということです。

(3月19日)「使徒言行録15:30~35」

さて、彼ら一同は見送りを受けて出発し、アンティオキアに到着すると、信者全体を集めて手紙を手渡した。

(使徒言行録15章30節)

- ・パウロやバルナバたちは、まずシリアのアンティオキアに行きます。この地はパウロの第一次宣教旅行で訪れた地です。エルサレム使徒会議での決定を彼らは聞きました。それは彼らにとって、「励ましの言葉」となりました。
- ・会議の決定事項は時として、聞く人々に重圧を与えます。「ああしなさい」、「これはダメだ」との言葉は、人々に不快感を与えることもあるのです。しかし聖霊に満ちたこの手紙の内容は、人々を励まし、よき方向へ導くものとなりました。
- ・それが「聖霊の働き」なのでしょう。わたしたちは自分の力に頼り、人を自分の思う方向へ導こうとすることがあります。しかしそうではなく、聖霊にすべてを委ね、お任せすることが大切なのです。

(3月12日)「使徒言行録14:8~18」

そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。
(使徒言行録14章12節)

- ・ヘロデ王が神さまに栄光を帰さなかったために息耐えた話が、12章20節には書かれていました。そして今、リストラで生まれつき足が悪い人を歩かせたパウロたちを見て、群衆は「ゼウスだ」、「ヘルメスだ」と騒ぎ立てます。
- ・しかしその不思議な業をおこなったのは、パウロでもバルナバでもありません。他ならぬ、神さまなのです。二人は自分たちにいけにえを献げようとする群衆をやめさせ、神さまの栄光を伝えます。
- ・わたしたちの周りでは、あまりに簡単に「神」という言葉が使われているように思います。すごい人や出来事を「神」という言葉を用いて表すことがあります。そのことは、本当の神さまを冒瀆していることになるのかもしれませんが。

(3月13日)「使徒言行録14:19~20」

しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバと一緒にデルベへ向かった。

(使徒言行録14章20節)

- ・リストラにいるパウロとバルナバの元に、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来ました。その目的は、パウロに石を投げるためでした。イコニオンからは30km、アンティオキアからは170kmもあったにもかかわらずです。
- ・ユダヤ人にとって、パウロの語ることは「異端」であり、自分たちが信じてきたことを覆す「誤った教え」でした。それが多くの人たちに伝えられていくことを、彼らは全力で阻止しようとしたのです。
- ・このユダヤ人の行動は決してほめられたものではありませんが、自分たちの信仰に真つすぐすぎた故のことなのです。パウロ自身も以前は同じように、キリスト者を迫害していました。石を受けたとき、パウロはその当時のことをどう振り返ったのでしょうか。

(3月14日)「使徒言行録14:21~28」

また、弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた。
(使徒言行録14章23節)

- ・パウロたちはデルベから、リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返していきました。パウロはリストラで石を投げつけられ、またイコニオンでは二人は辱められそうになりました。
- ・それでも彼らは、その地を通してアンティオキアに戻ることを選択しました。それは、それぞれの地に弟子たちがいたからです。パウロたちが告げ知らせる福音を聞き、信仰に入った人たちを力づけるためです。
- ・彼らはそれぞれの地の教会に、長老を任命しました。「自分たちがいなければダメだ」とは思わず、長老の働きを支えるのです。そして彼ら長老を、神さまにお委ねします。神さまの助けを求めていくのです。

(3月15日)「使徒言行録15:1~5」

ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。

(使徒言行録15章1節)

- ・この章に書かれているのは「エルサレム会議」と呼ばれる使徒会議で、紀元49年ごろ、つまりイエス様の十字架から10年以上経って開かれたものでした。その会議をしなければならなかった原因が、今日の箇所にあります。
- ・それは、「割礼」をめぐる問題でした。創世記17章9~14節には、神さまがアブラハムに永遠の契約のしるしとして、男子が生まれたら8日目に割礼をおこなうように命じたことが書かれています。
- ・ユダヤ教(ファリサイ派)から信者になった人たちは、その契約はそのまま引き継がれるべきで、異邦人から信者になった人も割礼を受けるべきだと主張します。割礼という「行為」が信仰に必要なかどうか、議論がおこなわれていくのです。

(3月16日)「使徒言行録15:6~11」

それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。

(使徒言行録15章10節)

- ・議論を重ねる中で、口を開いたのはペトロでした。エルサレムを離れ異邦人の地に向かったパウロと違い、ペトロはずっとエルサレムにいました。彼の周りには、ユダヤ人が多くいたことでしょう。
- ・しかし彼の口から出た言葉は、異邦人を受け入れようというものでした。10章に書かれたコルネリウスが聖霊を受けた出来事が、彼の心を変えたのです。それは、神さまの導きだったのでしょうか。
- ・割礼や律法という軛は、人々には負いきれないものでした。人間はおこないによって、神さまの前に正しく生きることができませんでした。そこで信じることによって義とされるという、新しい契約が示されたのです。古い契約に固執することはないのです。

(3月17日)「使徒言行録15:12~21」

ただ、偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにと、手紙を書くべきです。

(使徒言行録15章20節)

- ・パウロとバルナバの話が終わると、ヤコブが口を開きました。このヤコブは漁師からイエス様の弟子になったゼベダイの子ではありません。彼は12章2節でヘロデ王から殺害されていました。
- ・ここに出てくるヤコブは「主の兄弟ヤコブ」と呼ばれ、イエス様の弟、あるいはいとことされる人物です。彼はエルサレム教会の初代教会長を、紀元38年から62年まで務めたとされています。
- ・彼はペトロとパウロの話を受け、異邦人を受け入れるという判断をします。ただしユダヤ人にも配慮するように、手紙を書くように付け加えます。「白か黒か」ではなく、これまで大事にしてきたことに対して配慮する、すばらしいバランス感覚だといえます。